Abstract

芥川龍之介の自殺と植民地朝鮮の文学*

『京城日報』の芥川記事と朝鮮のモダニスト作家を中心に

金 孝 順
✉ uzzanzi@yahoo.co.kr

In this paper, I examine the character of primary Japanese media and literatures of the colonial period of Korea and analyze Akutagawa's published articles. The Government-General of Korea published *THE KEIJONIPPO*, the purpose of which was propagandization of the colonization policy of the Empire of Japan to both Japanese society in Korea and Korean society. As a result, the published literature comprising related articles was thoroughly written by the foremost writers from the Japanese mainland. In such a context, Akutagawa's articles were published although they were insignificant during his lifetime. But after Akutagawa's suicide, they were introduced to Koreans and Japanese in Korea through *THE KEIJONIPPO*. Akutagawa's literary works enjoyed renaissance and imitation suicides were committed in Korea where neurasthenia was recognized as a metaphor for modernity and civilized intelligence. This phenomenon affected Korean modernist writers who grew up with Akutagawa literature. For example, Park-Taewon and Lee-sang used neurasthenia as a metaphor for the helplessness and anxious spirit of the intelligentsia in the colonial period or as a metaphor for the despair and hopelessness of modern civilization. Thus, we confirm the diffusion of Akutagawa's literature within Korean society and literature through the official organ of the Government-General of Korea, *THE KEIJONIPPO* and the expanse of its influence.

Keywords "*THE KEIJONIPPO*"(『京城日報』), Akutagawa-Ryunosuke(芥川龍之介), neurasthenia(神経衰弱), Lee-Sang(李箱), Park-Taewon(朴泰遠)

* この論文は2013年韓国政府(教育人的資源部)の財源で韓国研究財団の支援によって行われた研究(KRF-2007-362-A00019)の成果である。

1. はじめに

1916年当時、最も優れた作家であった夏目漱石の絶賛を浴びた『鼻』(『新思潮』創刊号、1916.2)で華やかにデビューし、1927年7月に、あまりに早い自殺で生を終えた芥川龍之介は、確かに「大正期という一時代の文学精神を一身に具現した文学者」[1]と評価されるにふさわしい作家と言える。芥川は1927年7月24日未明、致死量の睡眠薬を飲んで自殺し、彼の自殺は彼の文学的影響力以上の影響力を持ち、日本の文壇はもちろん社会的にも大きい反響を呼び起こした。自殺の翌日である25日の朝刊は挙って芥川龍之介自殺の報道を大きく掲げ、『東京日日新聞』では「文壇の雄芥川龍之介氏/死を賛美して自殺す」の見出しで「常用していたヴェロナールを多量に服用し自殺を遂げた」と報道しており、『東京朝日新聞』では「芥川龍之介劇薬自殺を遂ぐ」との見出しの記事を載せている。こうした芥川自殺の報道について、関口安義は下のように説明している。

> 中央の新聞ばかりでなく、地方の新聞もすべてが重大ニュースとして芥川の死の模様を記事にした。社会面を全面つぶしでの報道が多く、衝撃の大きさを物語っている。記者会見で久米正雄が朗読した「或旧友へ送る手記」も同時に載った。芥川の死に関する新聞報道は翌日以後も続き、翌月末に至る。地方新聞も含めると、その両は厖大なものとなろう。後追いの自殺もかなりある。週刊誌も『週刊朝日』と『サンデー毎日』が龍之介の死の特集を組んだ。(略)
>
> 1927年9月号の雑誌は、競って芥川龍之介特集を行っている。『文芸春秋』『中央公論』『改造』『新潮』『文章具楽部』『女性』『婦人公論』『三田文学』などが特集を組んだ。ここに実に多くの人々が様々な角度から芥川龍之介とその文学に発言することになる[2]。

芥川の自殺が当時いかに大きな波紋を呼び起こしたか推し量れる文章である。このように芥川の自殺は日本の文壇はもちろん、社会的にも大きい衝撃を与えた事件であったが、それは日本国内ばかりではなく、当時日本の植民支配下に置かれていた朝鮮の文壇と社会にも大きな衝撃を呼び起こした。当時の朝鮮では在朝日本人を対象とした数多くの雑誌や新聞が発行されており、その中には植民政策上発行された御用雑誌や新聞も多数存在していた。そのようなメディアには、2、3日の時差を置いて芥川の自殺を報道する記事が次々と載せられた。関口は上述の文章で、芥川の自殺の社会的反響の大きかったことを述べながら、芥川関連資料を網羅した『芥川龍之介資料集成』(日本図書センター、1993. 9. 15)全11巻の中で芥川の自殺に関した記事が第3巻~第5巻を占めるほど、芥川の死後彼の人と文学への言及は生前をしのぐものであったと指摘している。しかし、当時日本の植民支配下に置かれ、日本の地方の一部としてその社会的波長の中にあった朝鮮で発行された日本語のメディアに載った記事はそこには含まれていない。し

1 臼井吉見『大正文学史』(東京：筑摩書房, 1984), p.241.
2 関口安義『芥川龍之介とその時代』(東京：筑摩書房, 1994), pp.679-680.

たがって、芥川の自殺、或いは文学が当時朝鮮の文壇と社会にどう受け入れられ、どのようにその影響力を拡張していったかに関する同時代的見方に基づいた研究はなされていない。もちろん、韓国の1930年代モダニスト作家の代表である李箱の文学と芥川文学との比較考察は最近ある程度成果をあげている[3]。しかし、この先行研究は二人の作家の作品内部のイメージ、テーマなどの類似性の究明に関する研究が主をなしている。

本論文では植民地朝鮮で発行された主要日本語メディアと文芸欄の性格を検討し、そのようなメディアに載せられた芥川関連記事を分析することによって、芥川の自殺と文学が植民地朝鮮の社会と文壇にどのように受け入れられていったのかその過程を考察している。これらの検討によって植民地朝鮮における植民宗主国の日本文学が、帝国の拡張によって植民地の文壇と社会に影響力を広げていく様相が究明できると思われる。

2. 在朝日本人社会の日本語メディアと日本語文学

1880年代以後、日本人の韓半島進出と同時に、韓国では植民支配の正当性を積極的に宣伝し、本国に植民地の情報を提供しようとする意図から、数多くの日本語新聞と雑誌が全国各地で刊行された。それらの雑誌にはほぼ例外なく＜文芸欄＞が設けられており、「在朝日本人に慰安と娯楽を提供」[4]し、「韓国移住日本人の国民的アイデンティティの確保」[5]という役割を果たしていた。それと同時に植民地期韓国で日本語で発行された雑誌や新聞には、文化接触地帯として植民地で発生する帝国と植民地文化間の衝突、変容、融合などの様相を見せる豊富な資料が掲載され、特に文芸欄にはそれが生々しく描かれている。

このような意味において、朝鮮統監府の三大機関紙の中心であった『京城日報』に掲載された文芸関連記事は注目に値する。この新聞は1906年9月伊藤博文の赴任後、侵略政策を効率的に遂行するために植民地朝鮮の首都京城で創刊されたものである。『京城日報』には＜学芸欄＞が設けられ、日本の伝統文学である和歌(京日歌壇)、俳句(京日俳壇)、川柳(京日柳壇)を持続的に掲載し、その他に文学評論、児童文学、読者投稿などが載せられた。それに加えて、朝刊、夕刊各々に長編小説なども連載されている。注目すべきことは、この学芸欄の執筆陣のほとんどは内地日本の記者や評論家で、特に長編連載小

3 例えば、노영희の「李箱文學과 東京」『比較文学16』, 1991)、조사옥の「이상문학과 아쿠타가와 류노스케」(『일본문화연구』제7집, 2002)、장혜정の『아쿠타가와(芥川龍之介)와 이상(李箱)문학 비교연구：'불안의식'을 중심으로』(한국외국어대학 박사논문, 2007.8)、김명주の「아쿠타가와 류노스케(芥川龍之助)와 이상(李箱)문학 비교－도쿄(東京)를 중심으로－」(『일본어교육』제44집, 2008), 「아쿠타가와와 이상문학에 있어서의 "예술관"비교(1)(2)」(『일본어교육』제50집/제54집, 2009/2010)、김효순の「이상문학과 아쿠타가와 류노스케(芥川龍之介)－시대를 체현하는 문화현상으로서의 모던걸 표상을 중심으로－」(『COMPARATIVE KOREAN STUDIES』제18권 제2호, 2010.8)などがそれである。

4 鄭炳浩「20世紀初期日本の帝国主義と韓国における「日本語文学」形成に関する研究：雑誌『朝鮮(1908~11)』の＜文芸欄＞を中心に」(『日本語文学』第37号, 2008), p.418.

5 許錫「明治時代韓国移住日本人文学に現れた内地物語と国民的アイデンティティ形成に関する研究」(『日本語文学』第39集, 2008), p.407.

説は徹底して日本内地の主要作家によって執筆されていることである。この時期植民地朝鮮で発行された雑誌、例えば植民地朝鮮の両大雑誌『朝鮮及満州』(1908.3~1941.1)、『朝鮮公論』(1913.4~1944.11)にも文芸欄は設けられており、これら文芸欄にも和歌、俳句、漢詩、漢文、随筆、小説という日本伝統の韻文ジャンルをはじめ、多様な文学作品が掲載されている。こうした雑誌の執筆陣のほとんどは植民地朝鮮に居住するアマチュア作家であり、植民政策が安定する1920年代末から1930年代には、朝鮮の文芸物の翻訳や朝鮮作家の創作物も徐々に増えていく[6]。ところがその一方『京城日報』の小説連載は徹底的に日本内地の主要作家によって占められており、＜学芸＞の執筆陣もほとんど日本人で朝鮮人は1940年代以後の極少数に過ぎなかった。読者投稿欄の投稿者も日本人が多く占め、投稿や公募の審査も与謝野晶子、菊池寛、久米正雄など内地の主要作家たちが担当していた。すなわち創刊以来徹底して執筆は内地日本人作家によって担われていたのである。その後『京城日報』において朝鮮人作家による小説の掲載は、牧洋(李石薫)の「永遠の女」(1942年10月28日~12月7日 / 総41回)まで待たなければならなかった。これは戦争の激化につれ、朝鮮語による創作が一切禁じられ国語(日本語)による創作を強要されていた、いわゆる「国民文学」時代に、「諺文雑誌に国語創作欄設定拡充」、「国語文学奨励のため文学賞設定」、「国民文学運動に熱意のある新人養成」という目的のもと、1939年10月29日に京城で発足された朝鮮文人協会の方針によって選択されたものである[7]。

要するに『京城日報』の＜学芸欄＞と長編小説欄は、日本帝国の移動と膨張とともに拡大される日本語文学の流通と消費の場となり、植民地に居住する日本国民に娯楽を提供し、国民としての一体感を維持する役割を果たしていたといえる。しかし、『京城日報』の文学関連記事はそれが総督府の機関誌に掲載されたという理由から、日本文学の研究からも韓国文学の研究からも排除されてきた。もちろん最近は韓国における植民地時期日本語資料への関心が増し、これら資料の発掘、整理、研究が少しずつなされつつある。しかし、それのほとんどが雑誌に片寄っており、新聞、特に完全に日本内地文学の流通と消費の場となっていた『京城日報』の文芸物に関する研究は近年の嚴基權の基礎資料の発掘・整理[8]がすべてである。

---

6 兪在眞は「『朝鮮(及満州)』の朝鮮人寄稿家たち」(『帝国の移動と植民地朝鮮の日本人』図書出版ムン，2010.10)で、日本語総合雑誌『朝鮮(及満州)』における朝鮮人寄稿家の記事のデータ分析を行っている。

7 『京城日報』における朝鮮人作家による作品掲載の意義について、嚴基權は「「京城日報」における「大衆小説」の成立と変遷―朝鮮文人協会の改革と国民文学をめぐって―」(『東アジアと同時代日本文学次世代フォーラム』2013.10.17)で、李石薫の「永遠の女」が内地日本作家の専有物である『京城日報』における初めての朝鮮人作家による作品であることを指摘し、その意義については「初めての朝鮮にはない大衆小説だと大きく宣伝したが、それは「ひまつぶし」で読めるような「軽いもの」の大衆小説で「時局を反映した」国語で書かれた小説であることが条件であった」と述べている。

8 「京城だより①佐藤春夫全集未収録資料」(『九大日文』16，2010.10)、「京城だより②「芥川龍之介全集」未収録資料紹介：宮崎光男との親交をめぐって」(『九大日文』17，2011.3)、「京城だより③『林芙美子全集』未収録資料紹介:ヨーロッパから帰国後の作品活動を中心に」(『九大日文』19，2012.3)、「京城だより④『定本久生十蘭全集』未収録資料紹介：“酒の害”について」、「激流」を中心に」(『九大日文』20，2012.10).

3. 芥川の自殺と植民地朝鮮における芥川文学の流通と消費

3-1.『京城日報』に掲載された芥川生前の文章と記事

上述のように『京城日報』の＜学芸欄＞及び連作小説欄は、日本内地作家の作品を以って占められており、そのような文脈で『京城日報』における芥川の文章や関連記事も検討する必要がある。まず生前に掲載された芥川の文章は「夏の感覚」(『京城日報』1957.7.15)と「小説「途上」宮崎光男作・梅津星耕画　本篇の作者のために」(『京城日報』1926.7.24)の二点だけである。

[表1]『京城日報』に掲載された芥川生前の文章と記事

筆者	題目	媒体	発表年月
芥川龍之介	夏の感覚	京城日報	1925. 7. 15
芥川龍之介	小説「途上」宮崎光男作・梅津星耕画 本篇の作者のために	京城日報	1926. 7. 24
広告	菊池寛・芥川龍之介両先生編集『小学生全集』大出版予告	京城日報	1927. 4. 10

「夏の感覚」は芥川自身にとって「夏は面白くない」理由を述べた短い随筆で、「小説「途上」宮崎光男作・梅津星耕画/本篇の作者のために」は友だちの宮崎光男の小説「途上」の予告記事である。芥川はこの文章で、宮崎光男に対して「松浦貧郎といふ変名で、朝鮮を題材とした「沼の彼方」といふ一篇を連載した」「氏の筆力は信頼するに足る」と友情を表している。また1927年4月には『小学生全集』の広告記事が目に立つ。この全集は1920年代の円本ブームに乗って興文社から依頼され菊池寛と芥川が企画したものであり、北原白秋の弟・鉄雄が経営するアルスが発行する『児童文学全集』の出版企画をめぐり、菊池寛と北原白秋が対立するようになったものである。この全集をめぐっての紛争は周知のように、芥川の自殺の原因の一つとして取り上げられているのでもある。

このように『京城日報』には多くはないとしても、内地の中堅作家として芥川の文章が載せられたり植民地朝鮮の文壇の権力者である菊池寛とともに肩を並べて広告欄に芥川の名前が登場したりしている。

3-2. 芥川の自殺報道と自殺の美化

芥川の死後には、自殺から2日経った26日から『京城日報』の自殺報道記事を筆頭として関連記事が増加する。一番最初に芥川の自殺を報道した記事は、「極度の神経衰弱から芥川氏自殺を遂ぐ」(『京城日報』1927.7.26)である。内容は「最後まで聖書を読み予て口にして居た平易な自殺法を決行、文壇の巨星は墜つ」、「児童文庫との喧嘩を非常に気にしてゐた」、原因は「菊池寛氏と共同執筆してゐた『小学校全集』と北原氏等の『児童文庫』とが衝突し出版界の喧嘩となつた事から氏は予て『闘ひ争ひを純な小学生に知らせるに忍びず』といひ、そのため極度の神経衰弱にかかりまた宿痾の肺結核等に悲観し毒薬を嚥

下したものと見られ口癖にしてゐた平易な自殺法を決行したものである」というのである。自殺の原因として『小学校全集』をめぐる紛争、神経衰弱、肺結核などを上げている。また死そのものについては「死の平静に飛び込んで仕舞ふ彼」、「永久の眠りは平和である。生きる為に生てゐる人間の憐れを感じた芥川氏の遺書」という風に、「文壇の巨星」が「平静」「平和」を求めた行動として描いている。このような論調は、上述した『東京日日新聞』の「文壇の雄芥川龍之介氏/死を賛美して自殺す」の見出しや、「死を持って芸術を完成させた」という点に同情を示す論もあった」[9]といったような日本内地の報道態度にそのまま従ったものと見てもよかろう。

［表2］植民地朝鮮における芥川自殺の報道記事

筆者	題目	媒体	掲載年月
	極度の神経衰弱から芥川氏自殺を遂ぐ	京城日報	1927. 7. 26
	文壇の寵児 芥川氏自殺 東京自宅で (文壇의 寵児 芥川氏自殺 동경자택에서)	毎日申報 (韓国語)	1927. 7. 26
	日本文壇の中心人物 芥川龍之介氏自殺、極度神経衰弱で (日本文壇의 中心人物 芥川龍之介氏自殺, 極度神経衰弱)	中外日報 (韓国語)	1927. 7. 26
	芥川氏告別式盛大に行はれる	京城日報	1927. 7. 28
	文学青年の飛び降り自殺芥川氏をまねた遺書を残し	京城日報	1927. 7. 28
高島平三郎	「芥川君の死」	京城日報	1927. 7. 29
	心身過労から来る神経衰弱症	京城日報	1927. 7. 29
釈尾東邦	自殺論―芥川龍之介の自殺を聞いて―	朝鮮及満洲	1927. 8

このような『京城日報』の報道態度は、ハングルの新聞の記事、すなわち「文壇의 寵児 芥川氏自殺 동경자택에서」(『毎日申報』1927.7.26)、「日本文壇의 中心人物 芥川龍之介氏自殺」(『中外日報』1927.7.26)でも同じように引き継がれ、自殺を決行する芥川の姿勢は「聖書を抱いて泰然飲毒」「尊敬すべき気概」のようにさらに美化されて描かれている。2日後報道された「芥川氏告別式盛大に行はれる」(『京城日報』1927.7.28)でも「死を賛美した芥川龍之介の告別式」「送られた無数の花輪は式場を埋め文壇の人々会葬し今更ながら文壇寵児の死をおしんだ」と、芥川が死を賛美した作家として描かれている。

このように植民地朝鮮のメディアは芥川の自殺を文壇の寵児・文壇の巨星・中心人物が神経衰弱で醜い人間の生から心の平静・平和を求めて選択した尊敬すべき行動として、在朝鮮日本人と朝鮮人に伝えていったことが分かる。

3-3. 模倣自殺の流行

上述のように芥川の自殺が醜い人間の生から逃れられる英雄の尊敬すべき気概とし

9 関口安義『芥川龍之介とその時代』(東京：筑摩書房, 1994), p.679.

て紹介されると、一般人の模倣自殺への恐れの声もあがった。例えば、高島平三郎は芥川の自殺による一般人の自殺の流行への恐れを以下のように述べている。

> 文士は一般の人々より遥かに神経質で一寸した事にも夫を深刻に考へて処理しようとする傾向をもつてゐる。加ふるに芥川君の場合は両三日続いた酷暑と例の小学生全集の刊行に関する世俗的な面倒くさい事件は遂に極端に神経質な芥川君を自殺まで誘つたものであらう。(中略)しかし原因、理由は何であるにせよ、自殺自身を絶対に認める事が出来ない。総て人生は如何なる場合においても自殺する必要はない。(中略)自殺は無信仰が生んだ悲劇であると断ずる。(中略)もつとも乃木将軍の自殺の如きは世人はこれを殉死と称して大いに美化してゐるが、しかも殺(ママ)そのものの感心出来ない事は同じである。(中略)私は芥川君の自決が一般的に流行せねばよいがと心配してゐる[10]。

高島平三郎は「文士は一般の人々より遥かに神経質」で、「神経質な芥川君」は「酷暑と例の小学生全集の刊行に関する世俗的な面倒くさい事件」のため自殺したとその原因を分析してはいるが、「自殺自身を絶対に認める事が出来ない」と言い「殉死と称して大いに美化してゐる」乃木将軍の自殺さえ「感心出来ない」こととして批判している。そして「芥川君の自決が一般的に流行せねばよいが」とのように、模倣自殺への懸念を表明している。

[表3] 植民地朝鮮における芥川模倣自殺の報道記事

題目	媒体	発表年月
文学青年の飛び降り自殺芥川氏をまねた遺書を残し	京城日報	1927. 7. 28
芥川気取りで内地青年の自殺 門司鉄道学校の生徒 阿峴里で自殺	京城日報	1927. 7. 29
日本でも芥川氏の自殺を真似て死んだ文学青年 (日本서도 芥川氏自殺 숭내를 내어서 죽은 문학청년)	中外日報 (韓国語)	1927. 7. 30
芥川氏の自殺に倣って阿峴で日本青年自殺、それらしい遺書まで書いて道路に横臥して轢かれて死んだ (芥川氏自殺 본바다 阿峴서 日青年自殺, 그럴듯한 유서까지 쓰고 차길에 누어 치어 죽엇다)	中外日報 (韓国語)	1927. 7. 30
芥川宗信者 娼妓と飲毒情死 並木町の情死騒動	中外日報 (韓国語)	1928. 3. 4

しかし、7月28日にはすでに「二十七日午前十時三十分大阪三越呉服店の七階より電車通り目がけて飛びおり自殺」した「鹿児島県の文学青年」[11]の事件を伝える記事が出る。それは「真面目に働いて居たが芥川龍之介氏の自殺に刺激され『陣痛の文藝』と題する原稿及び芥川氏そつくりの遺書が三通あつた」[12]と、芥川の自殺を内地青年がどのように模倣し

10 「芥川君の死」(『京城日報』1927.7.29).
11 「文学青年の飛び乗り自殺芥川氏をまねた遺書を残し」(『京城日報』1927.7.28).

たか詳しく紹介している。文士＝知識人の行動として芥川の自殺が青年たちの憧れの対象として刺激を与え、文士の真似をし模倣自殺を敢行していることがわかる。続いて29日には「二十八日午前六時五十分京城駅着奉天行列車が阿峴里トンネル内進行中線路に横臥して胸部および胸腕を切断され轢死した内地人青年」[13]と京城における内地青年の芥川模倣自殺事件が報道される。彼は門司鉄道学校の学生で、門鉄道発行の雑誌『潮』[14]ノートを所持しており、恋人宛の遺書には「あの指輪を僕と思つて呉れ。地下から貴女の幸福を祈る」、「三十一日に死ぬる予定であるが少し早く死の平静に飛び込みたいからだとか芥川龍之介もどきの文句あり」とし、ノートには「恋が何だ女が何だ、総て死の前には虚無ではないか」などと書かれてあり、「失恋の結果ナイヒリステイツクな気持を抱くに至り遂にこの始末におよんだものらしい」と解釈している。この青年も失恋で自殺を決心したのであるが、雑誌を持ち遺書に「死の平静に飛び込みたい」とか「総て死の前には虚無」という表現を使って文士のまねをしており、新聞でもそれを「芥川龍之介もどきの文句」だと解釈をして報道している。すなわち28日には早くも芥川の自殺が朝鮮の日本人青年に影響を及ぼし、虚無感を刺激して模倣自殺を呼び起こしたことが分かる。

さらにこの二つの事件はハングル新聞である『中外日報』でも、「日本でも芥川氏の自殺を真似て死んだ文学青年」という題目で、「芥川氏の自殺に倣って阿峴で日本青年自殺、それらしい遺書まで書いて道路に横臥して轢かれて死んだ」[15]と報道されている。『京城日報』を通して在朝日本人社会に伝えられた芥川の自殺事件は、『中外日報』を経て朝鮮人社会にも伝えられていったことが分かる。そして、とうとう1928年3月4日には「芥川宗信者娼妓と飲毒情死、並木町の情死騒動」という記事が出、「日本文士芥川龍之介をいつも賛美して歩いた男が」「生の苦悶と戦って厭世症を得阿呆のような女性を誘っていっしょに死のうとした」[16]事件を紹介している。この男は日本留学帰りの知識人で、芥川を賛美し生の苦悶と戦って厭世症で自殺を敢行したのである。芥川の自殺事件が日本内地から在朝日本人社会に伝えられ、植民地朝鮮の青年にも影響したのである。

上述のように芥川の自殺後、それが植民地朝鮮の社会に影響を広めていく過程とまとめてみると、芥川は「文士(知識人)」として「一般の人々より遥かに神経質」で、「神経衰弱」を持っており、それから醜い人間の生から心の平静・平和を求めて自殺を選択した人物として描かれ、模倣自殺者たちは、自殺をする際も文士のまねをし文学作品や雑誌を所持したり「虚無」、「ナイヒリステイツクな気持」、「厭世症」などの自殺理由を述べた遺書を残していることが分かる。すなわち、「虚無」、「ナイヒリステイツクな気持」、「厭世症」などを感じる「神経衰弱」で自殺を選択するのは、まさに知識人の表象となって、植民地朝鮮に伝えられたのである。

---

12 「文学青年の飛び乗り自殺芥川氏をまねた遺書を残し」(『京城日報』1927.7.28).

13 「芥川気取りで内地青年の自殺 門司鉄道学校の生徒 阿峴里で自殺」(『京城日報』1927.7.29).

14 どんな雑誌か未詳であるが、潮社の第1巻3号(1918.9)が確認できる。

15 「日本でも芥川氏の自殺を真似て死んだ文学青年」(『中外日報』1927.7.30).

16 「芥川宗信者娼妓と飲毒情死、並木町の情死騒動」(『中外日報』1928.3.4).

注目すべきなのは、神経症、神経衰弱という病気は近代文明の病気として1920~30年代、前世界的に通用された病名だったという点である。これは「近代性」または「近代性」に反応する精神及び身体の状況と深く関わる表象として認識され用いられた。元々、神経衰弱(nervous breakdown or neurasthenia)という診断名は、1869年George Beardというアメリカ人医者が使い初め一般化された[17]という。朝鮮においても、心と身の半ばにある媒介物として神経の関係に関する認識は1900年代に成立され、李海朝(1869~1927)の『枯木花』(『帝国新聞』1907.6.5~10.4)、李人稙(1862~1916)、「血の涙」(『万世報』1906.7.22~10.10)のような新小説にも「神経の損傷が精神混迷をもたらす」というような言い方が登場した[18]。また、『皇城新聞』、『大韓毎日新聞』のような1900年代のメディアには「神経衰弱」が独立的で明確な言葉として現れ始め[19]、『朝鮮及満州』には1910年代以後から神経衰弱に関する記事が非常に頻繁に出る。しかし、朝鮮の大衆的新聞や雑誌にこの単語が無数に登場するようになったのは1920年代からであり、この時から「神経衰弱」は単なる病名ではなく様々な文化的・社会的意味を持つようになる[20]。植民地朝鮮のメディアでは自殺の原因を神経衰弱で説明した。1921年7月『東亞日報』は「頻繁な漢江の自殺」という題目で、「去年8月以来神経衰弱にかかって世の中を悲観し自殺しようとした」[21]事件を報道しているが、「この短い文章の中に神経衰弱と自殺の相関関係に対する当代の認識方法が圧縮」されており、「＜神経衰弱＞ー世の中の悲観(厭世)ー自殺(企図)＞回路がある」と当時代の人は信じていた[22]。つまり、当時の朝鮮社会では、知識人というものは近代文明の病気である神経衰弱にかかって世の中を悲観(厭世)し自殺を選択するという認識があったのである。

要するに、芥川の自殺は神経衰弱にかかった近代知識人の行動として表象され、神経衰弱が近代性と文明知識のメタファとして認識された朝鮮社会の雰囲気と絡まって、模倣自殺現象を呼び起したと言える。

3-4. 朝鮮の読書界における芥川文学のブーム

これまでの内容で、芥川の自殺が朝鮮社会にどのように報道されていたか、またそれらは神経衰弱が近代性と文明知識のメタファとして認識された朝鮮社会にどのように受け入れられたのかを見てきた。ここでもう一つ指摘すべきことは、芥川の自殺という衝撃的な事件は朝鮮社会に波紋を投げかけただけでなく、植民地知識層とも関係が深い朝鮮読書界にもその影響を及ぼしているということである。それらの様相は『京城日

---

17 손광수「근대성의 매개적 언설로서의 신경쇠약에 관한 예비적 고찰ー박태원의 단편소설을 중심으로ー」(동국대학교 한국문학연구소『한국문학연구』29, 2005)。

18 이영아『육체의 탄생』(서울：민음사, 2008)参照。

19 例えば「西太后の病牀」(『皇城新聞』1901.5.27.)、「壯腸腋元丹」(『大韓毎日新聞』1908.12.2).

20 천정환「신경쇠약과 근대성」(『자살론』서울：문학동네, 2013), p.237.

21 「頻繁한 漢江의自殺」(『東亞日報』1921.7.21).

22 천정환「신경쇠약과 근대성」(『자살론』서울：문학동네, 2013), pp.238-239.

報』の紙面に急増した芥川文学記事、また芥川文学全集広告記事などから確認できる。

[表4]『京城日報』に掲載された芥川文学関連記事

筆者	題目	媒体	発表年月
矢野白雨	芥川氏の形相(上)	京城日報	1927. 8. 10
矢野白雨	芥川氏の形相(下)	京城日報	1927. 8. 13
東京にて 茶谷八郎	詩歌に現れた芥川龍之介(上)	京城日報	1927. 8. 18
東京にて 茶谷八郎	詩歌に現れた芥川龍之介(下)	京城日報	1927. 8. 20
	龍之介ものが最も多く読まれる 灯火可親の此ごろ京城読書界の傾向	京城日報	1927. 10. 7
東京 平井保興	芥川龍之介追悼 分芸講演会雑記(上)	京城日報	1927. 11. 8
東京 平井保興	芥川龍之介追悼 分芸講演会雑記(中)	京城日報	1927. 11. 9
東京 平井保興	芥川龍之介追悼 分芸講演会雑記(下)	京城日報	1927. 11. 10
星野静夫	文壇縦横語(二)(旋風はどこえ行く)＊逝ける両雄	京城日報	1928. 2. 14
圭四郎	有島武郎と芥川龍之介と(1)	京城日報	1930. 2. 11
圭四郎	有島武郎と芥川龍之介と(2)	京城日報	1930. 2. 13
圭四郎	有島武郎と芥川龍之介と(3)	京城日報	1930. 2. 14
圭四郎	有島武郎と芥川龍之介と(4)	京城日報	1930. 2. 15
圭四郎	有島武郎と芥川龍之介と(5)	京城日報	1930. 2. 18
圭四郎	有島武郎と芥川龍之介と(6)	京城日報	1930. 2. 19
圭四郎	有島武郎と芥川龍之介と(7)	京城日報	1930. 2. 20
圭四郎	有島武郎と芥川龍之介と(8)	京城日報	1930. 2. 21
圭四郎	有島武郎と芥川龍之介と(9)	京城日報	1930. 2. 22
圭四郎	有島武郎と芥川龍之介と(10)	京城日報	1930. 2. 23
圭四郎	有島武郎と芥川龍之介と(11)	京城日報	1930. 2. 24
圭四郎	有島武郎と芥川龍之介と(12)	京城日報	1930. 2. 28
圭四郎	有島武郎と芥川龍之介と(完)	京城日報	1930. 3. 1
古木鐵太郎	作家印象記(2)芥川龍之介氏	京城日報	1939. 6. 1

まず、芥川の死後『京城日報』の紙面には、作家としての彼の印象や文学を紹介する記事が頻出していることが目につく。芥川を科学的で理知なる秀才として評価した矢野白雨の「芥川氏の形相(上)」(『京城日報』1927.8.10)・「芥川氏の形相(下)」(『京城日報』1927.8.13)、『中央公論』の「現代芸術家余技集」に掲載された芥川の「餓鬼抄」への鑑賞を述べ、「作家芥川龍之介としてではなく、歌人芥川龍之介の方をより多く懐かしみたい」という茶谷八郎の「詩歌に現れた芥川龍之介(上)」(『京城日報』1927.8.18)・「詩歌に現れた芥川龍之介(下)」(『京城日報』1927.8.20)、有島と芥川の死を自然主義･資本主義への知識人の思想と生活における選択として比べた「有島武郎と芥川龍之介と」(『京城日報』1930.2.11ー1930.3.1、総13回)などがそれにあたる。これらの記事のすべては、芥川を秀才作家、懐かしい作家、時代を代表する知識人として評価している。

それと同時に1927年10月には、同年11月から刊行され始めた岩波書店の『芥川龍之介全集』の予約募集広告が5回に渡って掲載されている。そこには、編集同人(小穴隆一、谷崎潤一郎、恒藤恭、室生犀星、宇野浩二、久保田万太郎、小島政次郎、佐藤春夫、佐々木茂吉、菊池寛)の「故人の遺言によつて生まれた此全集は彼の藝術と生活とを伝へて余す所なく、其内容と其外観との渾然として調和せる」、芥川文子·芥川比呂志の「遺書によって岩波茂雄氏に頼む」という「芥川龍之介全集刊行の経緯について」、岩波茂雄の「営利を念頭に置かず一意専心立派な全集を作る」[23]などのような編集の趣旨が紹介され大々的に宣伝されている。さらに1934年10月には普及版『芥川龍之介全集』(岩波書店)の予約募集広告が二回に渡って載せられ、その中には「悲しい人生の殉教者が、多病愁との中に、生活を刻み、生命を削つてなせる静寂秀麗の文字を見よ。古典の如き沈思、近代の憂愁、冷静なる理知、高邁なる道徳をそこに見る。彼こそ真に藝術の聖使徒の名を以つて呼ばるべき曠世の天才であつた」という宣伝文句とともに、「本全集に寄せられた諸家の言葉」[24]として佐藤春夫、正宗白鳥、里見弴、志賀直哉、佐々木茂吉の言葉が載せられている。特に志賀直哉は「芥川君の仕事には何時の時代にも人々の記憶に甦るものがある。色の褪せないものがある」[25]と述べ、芥川文学の長い生命力を予言し讃えている。

以上のような芥川の自殺から起った彼の人と作品への関心の高潮と、その全集の広告は、植民地朝鮮における龍之介ものの流行を呼び起こした。当時、日本で出版された刊行物は、その出版とほぼ同時に、植民地の図書館や書店にも入荷されていたが、芥川の文学ブーム現象は「龍之介ものが最も多く読まれる 灯火可親の此ごろ京城読書界の傾向」という記事からも確認できる。この記事は副題の通りに読書の季節10月を迎え京城読書界を報道しているが、その中で「新刊書の中では龍之介物を筆頭に菊池寛氏の作品等も相変らず歓迎されてゐる」、「一方書店の景気について大阪屋号の話によると、矢張り龍之介の死後、その作品が著しく読まれ、雑誌では改造、文芸春秋キング等が競つてをり、婦人雑誌では主婦の友、婦女会成績がいい」[26]と、芥川死後の朝鮮の読書界の状況を紹介している。ここで言う大阪屋号とは当時朝鮮における第一の日本書籍販売書店で、この書店の景気で京城読書会全体の傾向が把握できる。すなわち、芥川の死後、芥川文学関連記事と彼の文学全集の広告が急増したことによって、朝鮮(或いは京城)の読書界で芥川文学ブームが起こったことがわかる。

つまり芥川の自殺をきっかけに、彼の人と作品への関心が高まり、出版ジャーナリズムの全集広告の力を借りて、植民地朝鮮における芥川文学ブームという現象を呼び起こしたといえる。

---

23 「予約募集・全八巻・芥川龍之介全集」(『京城日報』1927.10.8).

24 「普及版・芥川龍之介全集(岩波書店)」予約募集(『京城日報』1934.10.12).

25 「普及版・芥川龍之介全集(岩波書店)」予約募集(『京城日報』1934.10.12).

26 「龍之介ものが最も多く読まれる・灯火可親の此ごろ京城読書界の傾向」(『京城日報』1927.10.7).

4. 植民地朝鮮のモダニズム文学と芥川龍之介の文学

では、この芥川の自殺をきっかけとして植民地朝鮮の読書界、或いは出版業界でブームになった芥川文学は朝鮮の文壇にどのような影響を与えたのだろうか。それは、芥川の自殺により模倣自殺の流行と龍之介文学のブームが起った1920年代後半に、その文学形成期を過ごした朝鮮のモダニスト作家たちが本格的に文学活動を始める1930年代に顕著に現れるようになる。

1920年代末から1930年代初頭に日本の植民政策が安定するに従い、日本のモダン文化が植民都市京城に移植された。このようなモダン文化は、モダニズム作家たちの作品に強く反映されている。1933年8月に結成された文人団体「九人会」は、新しい感覚と技巧を持つ芸術派、技巧派として朝鮮モダニズム文学の中心をなしていた。彼らの作品には文学の形式的側面とともに、内容面においても日本を通じて入ってきたモダン文化が作品の主な背景となり、登場人物の生き方や行動様式にもモダン文化が反映された。このモダニスト作家たちのほとんどは若い時期の日本留学を通して、日本のモダニズム作家からの影響を受けていると一般的に説明されている。

しかし、彼らは渡日する以前から、すなわちその文学的土台の形成期に、すでに植民地朝鮮で日本文学に接する機会を持っていた。前節で述べたように、当時の植民地朝鮮では、それがたとえ総督府の機関誌であったとしても『京城日報』の紙面を通じて、または日本とほぼ同時に新聞に掲載される全集や雑誌の広告、図書館、書店などを通して、日本内地の主要な作家の作品や文学評論、文壇の状況などに自由に接することができたのである。特に、芥川の自殺による芥川文学ブームが起きた時期に、その文学的土台形成期にあった朝鮮の代表的モダニスト作家、李箱(1910~1937)と朴泰遠(1909~1986)の文学には芥川文学の強い影響が見られる。これに関して金允植は「芥川龍之介は李箱と朴泰遠の文学を理解するために、ぜひ確かめて置かなければならない日本の代表的文学者である。特に芥川の生と文学に対する愛着、共感は自分と彼を同一視させるくらいに強いものであった」[27]と指摘し、李箱と朴泰遠の文学、そして芥川文学との関係究明の必要性を指摘している。

このような経緯により、韓国では芥川と李箱の文学の関係について、いままで多くの先行研究がなされてきた[28]。しかしその一方、朴泰遠の場合は、彼の作品「寂滅」(1930.2.5~3.1)の「レイン·コート」のモチーフは、芥川の「歯車」における「レインコート」の「幽霊的幻影面モチーフの受容」であり、彼は「芥川龍之介の芸術至上主義にある程度傾倒されていた」[29]と指摘しているイジョンソクの研究が管見の限り唯一のものである。

---

27 김윤식,『이상연구』(서울：문학사상사, 1988), pp.179-180参照。

28 김명주の「아쿠타가와류노스케(芥川龍之助)와 이상(李箱)문학 비교－도쿄(東京)를 중심으로－」(『일본어교육』제44집, 2008),「아쿠타가와와 이상문학에 있어서의 "예술관"비교(1)(2)」(『일본어교육』제50집/제54집, 2009/2010)、조사옥の「이상문학과 아쿠타가와류노스케」(『일본문화연구』제7집, 2002)、장혜정の『아쿠타가와(芥川龍之介)와 이상(李箱)문학 비교연구：'불안의식'을 중심으로』(한국외국어대학 박사논문, 2007.8), 노영희の「李箱文學과 東京」『比較文学16』, 1991)。

また芥川と李箱の関係、あるいは芥川と朴泰遠の関係を論じる際、植民地朝鮮の文学環境と芥川文学との関係という側面から論じている研究は見られない。繰り返すが、彼らが文学的感受性と好奇心が最も旺盛であった文学形成期に、芥川の自殺事件による芥川文学ブームを経験したという事実は、それらが彼らの文学の土台形成と重要な関わりを持つ蓋然性が高いことを示唆するものである。

もっとも早い時期に、芥川の影響を見せている作家は朴泰遠である。彼は1926年すでに「お姉さん」という詩を発表し文学への強い関心を見せていた。1929年京城第一公立高等普通学校を卒業し、1930年英文学の勉強のため日本に行き、4月から法政大学予科に籍をおいて東京生活を始める。芥川との関わりをみると、芥川自殺当時の彼は高等学校在学中で、この時期に彼は日本文学と世界文学を渉猟する。彼の読書記録によると、17才ごろ「旧小説を卒業し新小説に入学し」[30]、学校も休学し、西洋の新しい文学作品と韓国の文芸雑誌を耽読している[31]。この時期から二十歳で日本に渡る前まで、すなわち1927年から1929年までは一日のほとんどを読書で費やしていた[32]。このように、早い時期から文学に強い関心を見せたこと、ちょうど芥川文学ブーム時期に旺盛な読書活動をしたこと、芥川の「歯車」の影響が見える「寂滅」が渡日以前に発表されたこと、などを合わせて考えると、朴泰遠が植民地朝鮮で流通·消費されていた芥川文学の洗礼を受けたことは十分考えられる。さらに彼は東京留学の際、「芥川の住んでいた所だったという理由で東京の田端に住まいを決めた」[33]というほど彼に傾倒していた。

このような芥川への傾倒は、かれの代表作「小説家仇甫の一日」(1934)に、芥川の名前を連ねていることにも現れる。

> それから余白に、鉛筆で、しかし羞恥心は愛の創造作用に助力を与える。これは愛に生命を与えることである。スタンダールが『恋愛論』の一切。それからは連絡なしで、『西部戦線異常なし』。吉屋信子、芥川龍之介。昨日どこへ行ったか。「ラブレター」を見たか。…… こんなことが書かれていた[34]。

この作品は空間的に1930年代の植民地朝鮮の首都京城を背景として、ある日、京城市内を散歩しながら、彼の眼に移った無気力な植民地朝鮮の日常生活を描いた作品である。その主人公仇甫が市内を歩きまわって経験する、電車の中－カフェー街－京城駅待合室－酒場は、すべて近代消費文化の空間である。仇甫はこのような近代空間を歩きまわる途中に、急に頭痛を覚えた。

---

29 이정석「아쿠타가와를 매개로 본 이상과 박태원의 문학－〈톱니바퀴〉와 〈적멸〉·〈지도의 암실〉의 상관성, 그리고 〈소설가 구보씨의 일일〉－」(『한중인문학』28, 2009), p.366.

30 박태원「순정을 짓밟은 춘자」(초출『조광』, 1937.10)(『구보가 아즉 박태원일 때』서울：깊은샘, 2005년), p.228.

31 강소영「박태원의 일본留学の背景」(『仇甫학회』제6호, 2011)参照。

32 박태원「순정을 짓밟은 춘자」(초출『조광』, 1937.10)(『구보가 아즉 박태원일 때』서울：깊은샘, 2005), p.231.

33 박태원「片信」(『동아일보』1930.9.26), p.113.

34 박태원「소설가 仇甫씨의 일일」(『조선중앙일보』1934.8.1~9.1)(『소설가 구보씨의 일일』서울：문학사상사, 1998), p.61.

仇甫はやがて橋の角に至った。彼の、何かあるように見せかける歩き方はそこで止る。彼はどこへ行くか考えてみる。どこもが彼が行くべき所だった。一カ所でも彼が行く所はなかった。

真昼の街の中で、仇甫は急に激しい頭痛を感じる。たとえ食欲は強くても、よく眠れても、それはやっぱり神経衰弱に違いなかった。

臭剝4.0/臭那2.0/臭安2.0/苦丁4.0/水200.0/1日3回 分服 2日分

仇甫は近代植民都市京城の真ん中で、自分は「神経衰弱」に間違いないと自家診断を下し、不眠症や食欲不振でもないのに、神経衰弱患者への病院の処方箋までを記録する。このように朴泰遠は植民地の近代都市京城で、朝鮮知識人が感じる無気力というものを、頭痛をひき起こす神経衰弱というメタファによって表現しているのである。

次に李箱の場合はどうであろうか。彼は1921年に新明学校を経て、1926年に東光学校、1929年に京城高等学校建築科を卒業する。その年から総督府内務局建築課に技師として勤め、朝鮮建築会誌『朝鮮と建築』の表紙図案懸賞募集に応募して当選している。李箱も朴泰遠と同様に芥川文学ブーム時期には高校在学中であった。その頃の彼は1931年に彼の代表作「異常な可逆反応」、「破片の政治」、「▽の遊戯」、「空腹」、「三次角設計圖」などが掲載された雑誌『朝鮮と建築』に大きな関心を寄せていた。

このような李箱は、やがて近代都市となった京城の街を闊歩しながら、カフェに親しむモダンボーイだと自称する。健康上の理由で滞在していた休養地から戻った彼は、「久しぶりに帰ってきた京城は限りなく懐かしい。京城から離れたくない。カフェ、それから脂粉の臭いも手痛いほど好きなのだ」[35]と述べ、近代都市京城に対する郷愁をあらわにする。そして東京に対する憧れや渡日への決意を、作品のいたる所で表している。作品「斷髪」(『朝鮮文學』,1939.4)は友人の妹と東京行を決意する話であるが、この他にも李箱は小説や随筆の中で、東京行の意志を積極的に書いていた。しかし、東京に行き、実際に彼の体験した近代都市東京とはどのような所だったのだろうか。

この「丸の内」という「ビル」洞里には「ビル」以外に住民はいない。自動車が靴の代わりをしている。徒歩している人は世紀末と現代資本主義を睥睨する偉い哲学人ー[36]

私は「タクシー」の中で二十世紀という題目を研究した。窓の外は今宮城の堀の傍ー無數な自動車が営々と二十世紀を維持するため余念がない。十九世紀の古くさい私は、私の道德性はどうしてあんなに自動車が多いか理解できないので、結局はひどくのんびりしているのである[37]。

銀座は単なる一冊の虚榮讀本である。ここを歩かなければ投票權が失われるような気がする。女子が新しい靴を買うと、自動車に乗る前、まず銀座の鋪道を踏んで

35 이상「첫번째 放浪」(『이상문학전집3』서울：문학사상사, 1993), p.155.
36 이상「東京」(『이상문학전집3』서울：문학사상사, 1993), p.95.
37 前挙書, p.95.

来なければならない。

昼の銀座は夜の銀座のための骸骨であるので、相当醜い。「サロン·春」、波うねる「ネオンサイン」を構成する火かきのような鐵骨たちの絡んでいる模様は夜を明かした女給の「パーマネントウエーブ」のように襤褸である[38]。

植民地の青年李箱にとって、これほどまでに憧れ新しい希望を求めて行った東京とは、20世紀の絢爛な都市の象徴であるネオンサイン、カフェ、コンクリートのビル、デパートなどが、不安と恐怖を呼び起こす混乱の空間に過ぎなかった。結局、彼は神経衰弱に陥り、作品「幻視記」(1938)の「ソン君」、「鼈鼈會豕」(1936)の「彼」、「失花」(1939)の「私」のような、不安と恐怖から自殺衝動や殺人衝動に襲われるという人物たちを作品に登場させ描いた。李箱は自己の死を前にして、次のように芥川への共感を吐露している。

これは本当に二度とない悲劇です。芥川や牧野のような人たちが味わったような最後の刹那の心境は僕も亦ある瞬間、電光のように短く、しかしはっきりと感じられ一切止まらないのです。帝展も見ました。幻滅というにはあまりにも惨憺な一場のナンセンスです。僕はそのペンキの悪臭に窒息するところで、つい鼻を塞いで飛び出してしまいました[39]。

ここで述べられている「芥川や牧野のような人たちが味わったような最後の刹那の心境」とは、他ならぬ、芥川が「ある旧友へおくる手記」(1927)で自殺の理由として言及した「未来に対するぼんやりした不安」だと言える。不安の内容は特定できないが、大正時代から昭和時代への急激な社会変化を指すのであろう。悪臭のペンキ、すなわち急激な近代文明の変化は、人々に不安や恐怖心を与え、芥川と牧野信一(1896~1936)を神経衰弱にさせたばかりでなく、李箱自身にも「小生東京来て、神經衰弱が極度に至りました!」[40]と告白せしめたのである。そして、李箱は以下のように、自殺意志の表明をしている。

十三本の遺書が完成されつつある。しかし、どれを選んでみても36才に自殺した、ある「天才」が枕元に置いていった蓋世の逸品の亜流から一方も出られなかった。僕にこれぐらいの才能しかないのが悔しくて腹が立ち焦燥の根元であった[41]。

ここでいう「36才に自殺した、ある「天才」」とは芥川のことを指すのであり、「蓋世の逸品」とは芥川の遺書「ある旧友へ送る手記」を指すものであると思われる。すなわち、李箱は急激な近代社会の変化による不安な気持ちと恐怖を感じる自分の心理を、芥川の自殺の一原因であった神経衰弱を借りて説明し、その心理を自分の心理と同一視していたことがわかる。

このように、芥川の自殺をきっかけにして植民地朝鮮で起こった芥川文学ブーム

38 前挙書, pp.96-97.
39 이상「사신(7)」(『李箱문학전집3』서울：문학사상사, 1993), p.236.
40 前挙書, p.236.
41 이상「종생기」(『李箱문학전집3』서울：문학사상사, 1991), p.380.

は、当時文学形成期にあった1930年代朝鮮の代表的モダニスト作家である朴泰遠と李箱に、強く影響していたことがわかる。すなわち、朴泰遠は植民統治下の朝鮮知識人が感じた無気力を、頭痛をひき起す神経衰弱というメタファによって表現し、李箱は急激な近代社会の変化による不安と恐怖の心理を芥川の自殺の一原因である神経衰弱を借りて説明しているのである。

5. 結び

以上、植民地朝鮮で発行された主要日本語メディアと文芸欄の性格を検討し、芥川関連記事を分析してきた。芥川の自殺は、主に総督府の中心機関誌であった新聞『京城日報』を通して朝鮮社会に紹介された。当時の主要日本語雑誌は、朝鮮社会に関する情報を内地日本人及び在朝日本人向けに提供し、植民や移民を奨励することを目的としていた。その＜文芸欄＞における初期の執筆陣は在朝日本人で、内容も彼らの朝鮮での生活を素材や背景としていたが、植民政策が安定するにつれ朝鮮独自の文芸物や、朝鮮人執筆者も次第に増えていった。それに反し、日本語新聞の『京城日報』は日本帝国の植民政策を在朝日本人及び朝鮮人に宣伝する目的で刊行されたもので、それに載せられた文芸関連記事は、徹底的に日本内地の主要作家によって占められていた。

芥川の文芸物もこのような脈絡から『京城日報』に掲載されたが、彼の自殺という行為とともに、彼の文学が植民地朝鮮の文壇と社会のなかで流通･消費されながら、その影響が朝鮮の知識階級に及んでいったことが分かった。さらにこうした文学的影響は当時文学的土台形成期にいた朴泰遠と李箱のようなモダニスト作家に現れ、彼らの文学において芥川の自殺の原因の一つとして語られた神経衰弱が、植民地知識人として感じる無気力と不安のメタファとして、あるいは近代文明への懐疑や絶望感のメタファとして、拡大されて用いられていたことが分かった。

参考文献

「芥川君の死」(『京城日報』)1927. 7. 29.

「芥川気取りで内地青年の自殺 門司鉄道学校の生徒 阿峴里で自殺」(『京城日報』)1927. 7. 29.

嚴基權(2013.10.17)「「京城日報」における「大衆小説」の成立と変遷―朝鮮文人協会の改革と国民文学をめぐって―」(『東アジアと同時代日本文学次世代フォーラム』第一回).

嚴基權(2010.10)「京城だより①佐藤春夫全集未収録資料」(『九大日文』16).

嚴基權(2011.3)「京城だより②「芥川龍之介全集」未収録資料紹介：宮崎光男との親交をめぐって」(『九大日文』17).

嚴基權(2012.3)「京城だより③『林芙美子全集』未収録資料紹介：ヨーロッパから帰国後の作品活動を中心に」(『九大日文』19).

嚴基權(2012.10)「京城だより④『定本久生十蘭全集』未収録資料紹介：“酒の害”について」、「激流」を中心に」(『九大日文』20).

「普及版 芥川龍之介全集(岩波書店)」予約募集(『京城日報』)1934.10.12.
「文学青年の飛び乗り自殺芥川氏をまねた遺書を残し」(『京城日報』)1927.7.28.
「予約募集 全八巻 芥川龍之介全集」(『京城日報』)1927.10.8.
「龍之介ものが最も多く読まれる 灯火可親の此ごろ京城読書界の傾向」(『京城日報』)1927.10.8.

강소영(2011) 「박태원의 일본유학의 배경」(『구보학회』제6호).
「芥川宗信者娼妓와 飲毒情死、並木町의 情死騒動」(『中外日報』)1928.3.4.
김명주(2008) 「아쿠타가와 류노스케(芥川龍之助)와 이상(李箱)문학 비교－도쿄(東京)를 중심으로－」『일본어교육』 제44집
김명주(2009/2010)「아쿠타가와와 이상문학에 있어서의 "예술관"비교(1)(2)」(『일본어교육』제44집).
김윤식(1988)『이상연구』서울 : 문학사상사.
김효순(2010.8) 「이상문학과 아쿠타가와 류노스케(芥川龍之介)－시대를 체현하는 문화현상으로서의 모던걸 표상을 중심으로－」(『COMPARATIVE KOREAN STUDIES』18-2).
노영희(1991) 「이상 문학과 동경」(『比較文学』6).
박태원(2005) 「순정을 짓밟은 춘자」(초출 『조광』, 1937.10)(『구보가 아즉 박태원일 때』서울 : 깊은샘).
「片信」(『동아일보』)1930.9.26.
박태원(1998) 「소설가 仇甫씨의 일일」(초출 『조선중앙일보』 1934.8.1～9.1)(『소설가 구보씨의 일일』서울 : 문학사상사).
「頻繁한 漢江의自殺」(『東亞日報』)1921.7.21.
「西太后의 病牀」(『皇城新聞』)1901.5.27.
손광수(2005) 「근대성의 매개적 언설로서의 신경쇠약에 관한 예비적 고찰－박태원의 단편소설을 중심으로－」(『한국문학연구』29, 동국대학교 한국문학연구소).
유재진(2010.10) 「『조선급만주(朝鮮(及満州))』의 조선인 기고가들」(『제국의 이동과 식민지조선의 일본인』서울 : 도서출판문).
이 상(1993) 「첫번째 放浪」(『李箱문학전집』3, 서울 : 문학사상사)
이 상(1993) 「東京」(『李箱문학전집』3, 서울 : 문학사상사)
이 상(1993) 「私信(7)」(『李箱문학전집』3, 서울 : 문학사상사)
이 상(1991) 「終生記」(『李箱문학전집』2, 서울 : 문학사상사)
이영아(2008) 『육체의 탄생』서울 : 민음사.
이정석(2009) 「아쿠타가와를 매개로 본 이상과 박태원의 문학－〈톱니바퀴〉와 〈적멸〉・〈지도의 암실〉의 상관성, 그리고 〈소설가 구보씨의 일일〉－」(『한중인문학』28).
「壯腸腋元丹」(『大韓每日新聞』)1908.12.2.
장혜정(2007.8) 『아쿠타가와(芥川龍之介)와 이상(李箱)문학 비교연구 : '불안의식'을 중심으로』(한국외국어대학 박사논문).
정병호(2008) 「20세기초기 일본의 제국주의와 한국의 '일본어문학' 형성에 관한 연구 : 잡지 『조선(1908~11)』의 <문예란>을 중심으로」(『일본어문학』제37호).
조사옥(2002) 「이상문학과 아쿠타가와 류노스케」(『일본문화연구』제7집).
「日本でも芥川氏の自殺を真似て死んだ文学青年」(『中外日報』)1927. 7. 30.
천정환(2013) 「신경쇠약과 근대성」(『자살론』서울 : 문학동네).

金孝順 Hyosun KIM

(韓国)高麗大学校日本研究センター。副教授。日本近現代文学、植民地時期戦争と女性、日本語に翻訳された朝鮮文芸物。『재조일본인과 식민지조선의 문화』(共著, 서울 : 역락, 2014),『一九三十年代東アジアの文化交流』(共著, 京都 : 思文閣出版, 2013)、「한일병합 전후 일본어잡지의 조선 문예물 번역 연구－『조선(급만주)』『조선(만한)지실업』『조선공론』을 중심으로－」(서울 : 『한림일본학』, 제22집, 2013.5)。